

950年1月

昆

蟲

(9)

でなく、明年似後この問題を追及して見たい。

3. 昨年から本年にかけての結果を雌雄をわけずにグラフにしたが、今後御指示のようにわけてやつて見たい。
4. 10 度位です。

オホニジウヤホシテナウの分布南限界の指標 としての夏期平均気温（豫報）

渡 邊 千 尚

Chihisa Watanabe: A preliminary report on the summer air mean temperature as an index of the southern limit of the distribution of *Epilachna vigintioctomaculata* Motschulsky.

オホニジウヤホシテナウ *Epilachna vigintioctomaculata* Motschulsky, 1857 (= *Epilachna niponica* Lewis, 1896) は日本列島、朝鮮、満州、シベリヤ、華北、甘肅省並に四川省などに廣く分布し、東亞の北方系昆蟲として知られている。本種の各地域に於ける分布南限界と平均気温との関係を現在までの資料に基いて検討すると次の如き結果が得られる。即ち本種の分布南限の臨界温度を年平均気温並に夏期平均気温(5月より10月までの各月の平均気温の平均値)を以て表わせば日本列島では 14°C 並に 21°C 、朝鮮では 14°C 並に 21°C 、満洲では 11°C 並に 21°C 、華北では 11.5°C 並に 21°C である。

以上の結果を見るに年平均気温にあつては日本及び華北との間に著しい相違があるにかかわらず、夏期平均気温にあつては各地域共に同一温度であることが明瞭に看取出来る。従つて本種の分布南限界の指標としては年平均気温よりも夏期平均気温を用いた方が普遍性があつて適切と思われる。しかし本種の分布南限の臨界温度として算定した夏期平均気温 21°C を以て直ちに指標として用いることは適當でない。現在までに判明した本種の分布状況を通覽するに大体夏期平均気温 20.4°C 以下の地には分布が確實で、 20.5°C — 21.5°C を示す地には本種の棲息が確認された地と然らざる地とがある。このような事實から夏期平均気温 21°C を中心として両側に 0.5°C の幅をもたせ、夏期平均気温 20.5°C — 21.5°C を以つて本種の分布南限界の指標とすることを提唱したい。上記の温度を示す地には本種の棲息する可能性があり、低温に向うにつれてその確實性が強くなるものと推定するのである。

上記の指標に基づいて本種の分布南限界の想定を試みれば次の如くである。即ち夏期平

均気温 21°C の等温線を中心として両側に 0.5°C の幅をもつ、換言すれば夏期平均気温 20.5°C と 21.5°C の兩等温線間の地帯を本種の分布南限帯であることを提言したい。この等温線を地圖上に求めれば茨城、千葉兩縣にまたがる太平洋岸に源を發し、關東地方の南方地區を廣い幅で通過し、伊豆半島の中央部を廻つて東海道の山腹を経て濃尾平野に達する。そして濃尾平野の北邊を廻つて、紀伊半島の中央を迂回して關西に出る。更に近畿平野の北邊を縫つて中國山脈の山陽側の山腹を通過し、山口縣の中央部を廻つて山陰側に至り、山口、島根兩縣にまたがる海岸より日本海に入る。そして朝鮮海峽を廣い幅で通過して黃海に入り、北上して山東半島の基部を横斷し山海關附近より華北平野に上陸する。而して華北平野の北端を通り、太行山脈に沿つて南下し、山西省を大原のやゝ南方地區にて横斷して、陝西省を経て四川省に達する。この等温帯が日本から華北に至る地域の分布南限帯と推定される。従つて本種の分布南限界は日本にては、本州の太平洋岸のやゝ北方地區、朝鮮、滿州にてはそれぞれその南端、華北にては北京と太原を結ぶ線附近に介在することになる。而して未だ本種を發見した記録はないが、山東半島の山間部には棲息する公算は頗る大きい。尙この分布南限帯以南の局所低温地區には生物學的孤島を形成して本種が棲息することを四國、九州の山岳地帯にその實例が知られている。因に本問題の詳細は近く『昆蟲』誌上に稿を改めて發表する豫定である。 [北海道大學農學部昆蟲學教室]

アオクサカメムシの一寄生蠅、ク라마ホシバイ に就いて

石 原 保

Tamotsu Ishihara: Some notes on *Gymnosoma kuramanum* Matsumura, a parasitic fly of *Nezara antennata* Scott (Diptera: Tachinidae).

アオクサカメムシ *Nezara antennata* Scott [Hemiptera: Pentatomidae] は日本の暖地に於ては看過出來ぬ大害蟲であつて、菜豆、蕃茄、胡瓜、白菜、玉蜀黍等、多数の科に及ぶ農作物に加害する。愛媛地方に於ける觀察では、菜豆及び虹豆の被害は特に甚しく夏期その種實を期待する事は殆ど出來ない。莢を採るものは別として、實採り用の

次頁の圖の説明 F ク라마ホシバイの雌 (The female of *Gymnosoma kuramanum* Matsumura), M その雄 (The Male of the same), H 寄主、アオクサカメムシ (The Host, *Nezara antennata* Scott), e 寄主の前胸腹面に産附されたクマラホシバイの卵 (The eggs of the fly which were laid on the prosternum of the host), E ク라마ホシバイの卵、各卵の形狀は稍變異を示す (The eggs of the fly, each is somewhat different in size). (各圖の傍らに示した長さは夫々 1mm. に相當する The length shown beside each figure denotes 1mm. respectively.)